

第2 教育研究団体の意見・評価

① 日本地理教育学会

(代表者 竹内裕一 会員数 約500人)

T E L 042-329-7729

地 理 A

1 前 文

本試験「地理A」の検討に当たっては、例年のように適切な素材を扱っているか、地理的知識をどのように問うているか、地理的な見方・考え方をどのように評価する問題なのかなどの観点から検討を行った。

本年の大問構成は、第1問「地理の基礎的事項及び日本の自然災害」となり、昨年登場した第2問「自然環境と自然災害」が、第1問のB大問として第1問に吸収された。また昨年の第4問は「地球的課題と世界の結び付き」のA・B2大問構成であったが、本年は地球的課題のみの大問となっている。そして本年第3問には地誌ラテンアメリカが加わっている。

これらの変更は、新高等学校学習指導要領（以下「学習指導要領」という。）で学習した生徒の受験2年目であり、カリキュラム変更の過渡的な影響と推測される。

2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等

第1問 ほぼ例年どおりで、今年もいろいろな図を散りばめた出題がされていたが、出題形式の工夫という点では、あまり評価はできない。工夫された地図やグラフ、また思考プロセスを問うような出題が見られず、単調なものとなっている。地理情報技術の進展に伴い、地図の工夫の可能性は大きくなっているにも関わらず、そのような図版の作成が見られないのは残念である。

問1 「地理B」では学習指導要領に「各時代の人々の世界観をとらえさせ」という一文があるが、「地理A」では、古地図は指導要領解説に地図に親しませる工夫の一つとして示されているのみである。実際、「地理A」の教科書では会社によって扱いは分かれている。これが「地理A」の基礎事項といえるのか疑問。古地図についての出題は良いが、図法など技術的なものなど「地理A」での出題に相応しい内容がほしい。

問2 メルカトル図法は円筒図法に分類されるが、緯線間隔は図上に引いたある方向線と経緯線とのなす角が地球上と等しくなる条件（正角条件）を満たすように数式によって与えられており、幾何的な投影によるものではない非投射図法である。①の文章から投射図法が想起される。これによって得られる図法は心射円筒図法やランベルト正積円筒図法などである。解答者は難なく②を選択すると思われるが、①の文章についてはより正確な表現が必要である。また、出題とは関係がないが、文章の最後にある「羅針盤による航海が行われていた時代には広く使われていた。」という部分であるが、この表現ではメルカトル図法が“過去のもの”として扱われるような雰囲気となる。現在、メルカトル図法はインターネット上の地図の表現方法として数多く使われており、現代の代表的な図法の一つである。

問3 植生についての基礎的基本的な知識についての出題である。

問4 アジアの人口が世界の半分以上を占めることが理解できていれば、4億5千万人の①に目が向く。「標高10m以下の…」という視点（データ）がいかせていない。新しい素材を模索し、チャレンジした出題であろうが、地理的思考力を問えていないのが残念である。また、②と③の数値の差があまりなくヨーロッパと北アメリカを判断しにくいところが気になる。

問5 乾燥地域での水資源と人間活動についての基礎的な知識についての出題である。

問6 沖積平野でみられる水害に対する取組についての出題である。河道の直線化や遊水地だけでなく、霞堤や水屋なども取り上げている。防災教育においては、現在の取組だけでなく、歴史的防災遺産も教授すべきだと考えるので、この点は評価できる。問題形式として、正誤判断が文章全体に及んでいるので、気を付けて読まないで解答できないものとなっている。

問7 適切な写真を使っており、良問である。

問8 旧版地形図の利用価値を示した出題であり、問いかけの内容も適切で良問である。短文中に「水田がみられる」とあるが、旧版地形図なので水田記号は現在のものとは異なる。通常地形図には判例が記載されており、分からなければそれを見るように指導している。特に、旧版地形図の記号については配慮をお願いしたい。

第2問 世界の生活・文化に関する大問。写真、分布図、統計資料を用い、多面的に地理的事象を読み取らせようとする姿勢は評価できる。大学入試としてはやや易しい問題が多いように思われる。

問1 イスラーム（イスラム教）の宗教建築物は特徴がつかみやすいので、容易に判断できるであろう。

問2 解答は難しくはない。知識を問う問題が続くので、問い方に工夫がほしい。

問3 「地理A」の特性を考えた出題であると思うが、解答は容易で、常識で判断できる。大学入試レベルとしては、難易度が低いのではないか。

問4 アはモンスーンアジアから米、イはメキシコからトウモロコシと判断できる。基本的なレベルの問題である。

問5 A付近が地中海性気候であることは基本的な知識であり、解答は難しくない。

問6 どの国を問うかで難易度は変わるが、オランダを問うているので易しいと思われる。オランダは先進国であり国民総所得も高いため、食料供給量が多くなるうえ、自然環境及び歴史・文化から牛乳・乳製品が占める割合が高くなる。

第3問 ラテンアメリカに関する問題である。写真や雨温図、分布図といった資料を活用した出題と説明文を読んで解答する出題がある。小問ごとに独自の出題がなされている。地形や気候、人口構成、食文化、農業、経済状況、観光について幅広く聞く問題であり、問題形式としては標準的といえる。

問1 衛星画像と解説文からサンゴ礁、三角州、フィヨルドの地理的特徴を確認する基本的な問題で、良問といえる。写真がより鮮明であれば解説文が不要となり、より完成度は高まったと思われる。

問2 ラテンアメリカの気候の特徴についての理解を問う基本的レベルの問題。

問3 各国の人口構成についての基本的な知識を問うもので、日頃の学習の成果を問う意味で適切な問題といえる。

問4 ラテンアメリカの食文化について聞く問題である。食文化と民族、気候の関連性についての理解を問うという意図であろう。白黒の写真では食材などを判別することは難しく、結

果として写真がなくても問題は成り立っている。写真をいかす工夫が必要。

問5 ラテンアメリカにおけるサトウキビ、大豆、バナナ、ブドウの主な産地が地図に示されており、設問は大豆の分布について聞いている。大豆を問うことで、近年の変動とその背景についての理解を求めていると考えられ、良問といえる。

問6 移民の動向、農地所有の特徴、貿易構造、MERCOSURについて述べた文章が示され、適当なものを選択する。誤文が明確なのでやや易しいのではないか。

問7 カリブ海の島々における観光客の特徴についての問題である。観光客数と客の居住国を示した地図を読み取り、その背景について考察させるもので、良問といえる。

第4問 地球的課題に関する大問である。昨年は二つの分野から出題されていたが本年は一つに絞っている。短文の正誤、グラフ、表、地図の読解などバランスが取れた出題となっている。

問1 人口の推移に関する問題。四つの地域を比較すれば、その特徴は明確となる。比較的易しい問題である。

問2 受験者にとって初見のグラフであろう。しかし、グラフの見方さえ分かれば3つの国群の違いが明確なので解答できる。グラフの読解能力を見る良問である。

問3 短文読解による正誤判定問題。常識的レベルであり、正答率が高いと思われる。

問4 表の読み取り問題。四つの国は供給量、自給率のいずれかに明確な特徴がある。どの国を問うかで難易度は変わるが、ロシアを問うたのは適切である。

問5 短文読解による正誤判定問題。基礎的な知識を図る問題である。地理学習の成果を測る事象が記されており好感が持てる。

問6 地図と説明文を組み合わせた問題。出題方法に工夫がみられる。単に言葉を知っているかということではなくその意味を正確に理解しているかを見る良問である。

第5問 長崎県壱岐市の壱岐島における地域調査の問題である。地勢図や新旧地形図の読み取り、写真判読や統計資料の読み取りなど、これまでの出題傾向を踏襲した問題構成である。昨年度も登場した登場人物と関係者との会話文も引き続き出題された。難易度は標準的であった。

問1 壱岐島の地勢図を基に読み取れる地形の特徴を判定させる問題。各所に100m以上の三角点が存在するため、答えは容易に導ける。しかし、等高線が連続的には見られない地形であり、数字も等高線のラインと重なっている場所が多く、判定させるベースマップとしてやや難ありではなかったか。

問2 新旧地図の比較から、その変化を判読させる問題。渡船を表す破線がなくなっているのに気付けば、判読は容易である。ただ、大問1の8同様、旧版の地図記号については、授業現場でそれほど詳しくは扱ってはならず、特に水田の記号を判読させるのは注意が必要ではないか。

問3 写真から地図上の地点を判別させる問題。設問自体は容易ではあるが、地図上のイの方向には畑を表す「V」が示されているが、写真Bではそれが畑なのか、水田なのかの判定が難しい。白黒で表現する以上、もう少し配慮がほしい。

問4 民家の配置図から、その地域の自然環境を読み取らせる問題。選択肢はいずれも明確に判別でき、平易である。

問5 会話文からその地域の漁業の特徴について判定させる問題。使用された漁業センサスや会話文のヒントなどを総合すると、容易に判定できたのではないか。

問6 地方や離島が抱える問題点について、統計地図を用いて判別させる問題。人口5万人の都市の位置が示されており、主要都市と離島との比較において、それぞれの項目を整理できる。データと地図とを用いながら、多角的に地域を読み取らせようとした良問といえる。

問7 自然災害や防災について、その適切な調べ方を判定させる問題。選択肢は比較的分かりやすく、判定は容易。

3 ま と め

検討の結果、全体的に写真・地図・統計などの素材が、適切にかつバランス良く出題されており、地理の見方・考え方を問う内容となっている。また地理的知識の問題についても、学習範囲の中に収まっており、高等学校で学習した内容を的確に評価する問題となっていた。出題者の努力に敬意を払いたい。一層の発展のため、次のような課題を指摘したい。

まず、次期学習指導要領で必修化が検討されている科目「地理総合（仮称）」との関連である。無論「地理A」と「地理総合」は別科目であることはいままでもない。しかし、次期設定科目の方向性から、現行の「地理A」の内容を逆照射してみることは、検討方法として有効である。この地理総合では、柱の一つとして、「地図と地理情報システム」が挙げられ、新しい地図技術の進展に伴う幅広い地理的技能の習得が述べられている。こうした観点から見ると、今回の地図分野での出題は、少々物足りなく感じる。

次に、センター試験は地理の試験としては、最大規模であり、高校地理の現場に与える影響力は多大である。このことを考慮した出題をお願いしたい。例えば、今回旧版地形図の出題が2題あり、水田の地形図記号の知識が判読のポイントとなった。旧地形図記号を知らなければ解けないというメッセージを高校現場に発することになりかねない。そういう見識もあり得るかもしれないが、むしろ地理的考え方や地理的技能の重要性をアピールするべきであろう。

地 理 B

1 前 文

出題に際して写真や地図・統計などの素材がバランス良く配置されているか、問われている地理的知識が適切か、地理的見方・考え方が生かされているかなどについて検討した。全体的な出題形式や内容については例年どおりであったが、特に今年度は地図やグラフなどの図的表現による出題が全体を通じて数多く見られた。出題のためのオリジナルの主題図が多く作られ、地理の学習で扱うグラフ形式はほぼ一通り網羅され、それぞれが設問の随所に織り込まれていた。図版の枚数を比較すると、一昨年までは、毎年40枚程度であったのが、昨年は50枚を超え本年はさらに60枚を超えている。これだけの図版を用いての出題は特筆に値するだろう。問題作成者の気概が伝わる。特に、工夫された地図を用いた出題は、地理に相応しい思考力・判断力が要求され、良問とされている。大学入試センター試験（以下「センター試験」という。）にしかできない贅沢ともいえる出題である。しかし、その中には課題もある。一般図の代表的な存在である地形図であるが、図式が大きく変わり、1：50000地形図の未更新問題も抱えている。センター試験にとどまらず、地理の学習そのものにおける課題ではあるが、センター試験での出題の影響は大きいので、その扱いには十分に考慮が必要であろう。

2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等

第1問 配点や問題数は昨年同様で、問題の傾向に大きな変化はなかった。問5・6は自然災害に関する出題であった。自然災害は地理としての特色がよく表れる分野であり、継続的な出題が望まれる。

問1 大陸規模の地形断面図問題は、しばしば出題されてきたが、海底地形の断面問題は珍しい。受験者は意表を突かれたかもしれない。しかしながら日本周辺の断面図を選択するため、海溝の位置などの基本が分かっているならば、解答可能である。良問と判断する。

問2 海水を素材にしている。これも意表を突いた出題。海水分布の知識が必要なのではなく、海流の基礎的理解を問うている。良い素材を選択したといえる。これも良問であろう。

問3 これまでも類似の出題はあった。世界の気候について、気温の年較差と降水量からたずねている。取り上げた地点は、北半球のほぼ同緯度で西岸・東岸・内陸などの特徴的な地点で、適切である。

問4 ヴェネツィア周辺の地形を示した出題である。素材選択の工夫が見られるが、単純に地形用語の知識を問う問題になっているのが惜しまれる。

問5 大陸別の自然災害について、統計を用いた出題である。各大陸の人口や経済状況などが理解できていなければならない。地理的思考力を問う優れた出題である。

問6 防災マップをよく読めば、解答にたどり着ける。しかし①の短文については、図だけでなく凡例もしっかり見ないと正解できない。ミスを誘発しやすい出題である。凡例をしっかりと読み込むことは読図の基本なので、このような出題もありえると考える。

第2問 資源と産業に関する出題。出題形式や出題内容、地域などのバランスが考慮されている。全体としては日頃の学習を測るうえで適切なレベルの出題になっている。

問1 正解は④であることには間違いはない。しかし、③の遺伝子組み換え作物を使用した加工食品が全く輸入されていないかどうかはやや疑念がある。

問2 基本的レベルのグラフの読解。一人当たりの農地面積から、アジア・アフリカとオセア

ニア・北アフリカに分けられる。GDPに占める割合からアジアとアフリカを識別する。典型的な読解のステップを踏んで解答できるので適切な出題である。

問3 バイオマスを取り上げたことは評価できる。誤文が明確なので正答率が高いと思われる。常識レベルの問題。難易度のバランスを取るための出題だろうが工夫が欲しい。

問4 表の読解。どの国を占めるかによって難易度は変わる。イギリスに北海油田があることに思い付けば解答できる。基礎的な知識と読解を組み合わせると良問といえる。

問5 地図の読み取り問題。上位8か国としたのは地図を見やすくする意味で適切。違いが明確なオーストラリアと中国の特徴に気が付けば解答できる。良問としたい。

問6 工業都市の特徴を問う問題。文字だけの出題であるが、バランスから考えると許容できる。大学入試レベルの基礎知識を問う問題として適切である。

第3問 例年の通り都市と村落、生活文化に関する大問となっている。景観写真、散布図グラフ、階級区分図をバランス良く用いた出題がされている。また、出題内容も都市、村落、生活文化についてもバランス良く出題されている。解答に際しても地理的な見方・考え方をきちんと求めている出題も多く、地理ならではの出題といえる。第3問全体としての構成も良い。

問1 住宅景観についての写真を用いた出題であり、適切な内容である。ただ、景観写真を詳しく見なくても、説明文のアンダーラインだけでも解答が可能になってしまうところが残念である。

問2 第3問全体の中で触れられなかった内容を上手に盛り込んだ出題である。グラフや地図を用いた出題は、どうしても、狭い範囲についての内容になってしまう。このような形式の正誤問題では、広い範囲の出題として使うことによって隙間を埋めることができる。第3問全体のバランスを取っている良問である。

問3 2変数の関係を示した散布図グラフを用いた出題である。散布図グラフの利用範囲は広いと、ともすれば、出題のために2変数がなんでも使われてしまうこともある。しかしここでは、適切な関係の2変数を用いて、また、適切な4か国を選んで出題されている。良問である。

問4 人口増加率の経年変化の様子を見抜く問題であり、首都圏の近年の人口構造を捉える良問である。昨年に引き続いての、小地域単位の国勢調査におけるデータを使って描いた階級区分図の出題である。国勢調査データを利用した学習はGISの活用に対応しいものであり、このような出題はGISを念頭においた作業学習などの促進につながる。

問5 良問ではあるが、三つの階級区分図自体もそれぞれが特徴的なものとなっており、これらを弁別することも出題の中に取り入れてしまうような工夫も可能であったと思われる。

第4問 中国に関する問題である。地図やグラフといった資料を活用した出題と説明文を読んで解答する出題がある。小問ごとに独自の出題がなされている。地形や気候、農業、環境、経済、民族について幅広く聞く問題であり、問題形式としては標準的といえる。地誌の問題は日頃の学習成果が反映しやすい。一方、一歩間違えると、重箱の隅をほじくるような問題となる恐れもある。今回は全体として基本的な内容の出題が多く適切であった。

問1 ヒマラヤ山脈、黄土高原、桂林における特徴的な地形についての問題である。レス、タワーカルスト、モレーンについて述べた説明文があり、どの地域で見られるかを解答する。中国各地の特徴的な地形についての理解を問う基本的なレベルの問題である。

問2 ウルムチ、瀋陽、福州、昆明のハイサーグラフが示され、昆明のものを選ぶ。地理的な見方、考え方を測るために各都市は地名ではなく地図上の位置で示されている。中国各地の気候の特徴について基本的な理解を問うもので、良問といえる。

- 問3 中国におけるイモ類、茶、野菜の産地についての問題。地図に各農作物の作付面積上位10省が示されており、農作物の特徴から中国における主な産地を考えることができるかを試している。地理的な思考力を問うもので、良問といえる。
- 問4 中国における大気汚染についての問題である。中国各地における冬季の大気中の硫黄酸化物濃度を示した地図を読み、大気汚染について述べた文章の中から誤った部分を選ぶという設問になっている。中国における大気汚染とその背景についての理解を問うもの。時事性を踏まえており、良問といえる。
- 問5 中国の経済発展の格差に関する問題である。シャンハイ市とチンハイ省について書かれた選択肢の文章の中から正しいものを選ぶ。沿海部と内陸部の格差についての理解を問う基本的な問題である。
- 問6 中国における少数民族地域についての問題である。学校教育、漢族との関係、風習習慣、環境について述べた選択肢から不適当なものを選ぶ。①が明らかな誤りなので迷わないだろうが、観光客数の変化など、少数民族地域の状況について多少細かいことを扱っており、詳細な学習が必要という誤ったメッセージと取られる懸念がある。
- 第5問 スペインとドイツの比較地誌に関する大問。図表、分布図、統計資料などを用い、多面的に地理的事象を読み取らせようとする姿勢は評価できるが、難易度に改善を要する設問が見られた。比較地誌は、類似性と対称性という視点があるが、類似性は暗黙の了承事項として扱われている。類似性についての問いもあっても良いと思われる。
- 問1 標高はメセタと呼ばれる高原が広がるスペインの方が高くなる。一方、年降水量は、地中海気候が分布するスペインの方が少なくなる。図表の読み取りに加え、自然環境の理解を踏まえた地理的思考力を試す良問である。
- 問2 スペインとドイツは、ともにワインの産地として知られている。原料のブドウは高温乾燥の気候を好むため、ドイツで南部に多く見られる②であると判断できる。
- 問3 評価の分かれた問題である。都市の細かい位置や都市別の日系現地法人数など、かなり詳細な知識が要求され難問であるという意見がある一方、都市の分布や日系現地法人の分布はそれぞれの国の特徴がよく表れており、面白い視点の良問であるという意見があった。
- 問4 難易度がやや高い問題である。ドイツ、フランス、ポルトガルのいずれかの国が図中に示されていないと、解答は難しいのではないと思われる。もっとも、過去にも同様の形式の出題があり、準備をしていた受験者は容易に解答できたかもしれない。
- 問5 スペインは、主に南アメリカを植民地化したことから、①が誤りであることは容易に判断できる。難易度のバランス調整の意味があるかもしれないが、工夫してほしい。
- 第6問 長崎県壱岐市の壱岐島における地域調査の問題である。地勢図や新旧地形図の読み取り、写真判読や統計資料の読み取りなど、これまでの出題傾向を踏襲した問題構成である。昨年度も登場した登場人物と関係者との会話文も引き続き出題された。難易度は標準的であった。
- 問1 壱岐島の地勢図を基に読み取れる地形の特徴を判定させる問題。各所に100 m以上の三角点が存在するため、答えは容易に導ける。しかし、等高線が連続的には見られない地形であり、数字も等高線のラインと重なっている場所が多く、判定させるベースマップとしてやや難ありではなかったか。
- 問2 新旧地図の比較から、その変化を判読させる問題。渡船を表す破線がなくなっているのに気付けば、判読は容易である。ただ、大問1の8同様、旧版の地図記号については、授業現場でそれほど詳しくは扱ってはならず、とくに水田の記号を判読させるのは注意が必要で

はないか。

問3 写真から地図上の地点を判別させる問題。設問自体は容易ではあるが、地図上のイの方向には畑を表す「V」が示されているが、写真Bではそれが畑なのか、水田なのかの判定が難しい。白黒で表現する以上、もう少し配慮が欲しいところである。

問4 民家の配置図から、その地域の自然環境を読み取らせる問題。選択肢はいずれも明確に判別でき、平易である。

問5 会話文からその地域の漁業の特徴について判定させる問題。使用された漁業センサスや会話文のヒントなどを総合すると、容易に判定できたのではないか。

問6 地方や離島が抱える問題点について、統計地図を用いて判別させる問題。人口5万人の都市の位置が示されており、主要都市と離島との比較において、それぞれの項目を整理できるだろう。データと地図とを用いながら、多角的に地域を読み取らせようとした良問といえる。

問7 自然災害や防災について、その適切な調べ方を判定させる問題。選択肢は比較的分かりやすく、判定は容易だった。かつて、常識的ともいえる出題であったこともあったが、今回は地理の特性が現れており好感が持てる。

3 ま と め

次の高等学校学習指導要領（以下、「学習指導要領」という。）の地理総合（仮称）は必修となる。地理総合で学んだことを土台として地理探求（仮称）を学ぶように位置づけられる。地理総合では広く応用が可能な知識（方法知）が重要視され、それを踏まえたうえで地理探求において知識（内容知）を深める。現行の「地理A」と「地理B」との関係とは異なる。例えば地理総合の学習内容の一つの柱としてGISがあるが、この考えに基づくと地理の全ての学習に際してGISの活用がなされることとなる。試験問題についていえばGISを単独の設問で問うのではなく、設問の随所においてGISを活用した設問が盛り込まれることになる。大学入試センター試験でもこのような考え方を入れることで、次の学習指導要領を見据えることともなろう。毎年およそ15万人が受験する本試験「地理B」での出題は全国の高等学校の地理の教育現場に与える影響は大きい。今回の「地理B」でなされたような出題を今後も期待したい。

② 全国地理教育研究会

(代表者 遠藤文雄 会員数 約500人)

TEL 0422-46-4181

1 前 文

全国地理教育研究会は、主に全国の高等学校で実際に地理を担当している教師を中心として構成された研究組織で、会員は年1回の研究大会と年2回の会報の発行を軸に研鑽を重ねている。それだけに、大学入試センター試験（以下「センター試験」という。）の問題には強い関心を持っている。毎年、センター試験の実施後には検討会を設け、さまざまな角度から意見交換を行っている。今回も、常任委員会で出された声をまとめ、本会の意見・評価とする。

さて、新高等学校学習指導要領（以下「学習指導要領」という。）もとの2度目の出題ということで、本会では今年度のセンター試験についても、大問構成などで変化がみられるか注目していた。結果としては、大問数は変わらず、新要領のキーワードの一つである「災害」や「防災」を前面に押し出す出題と「比較地誌」を扱う大問が引き続き出題された。この点にも注目し、以下に意見・評価を述べていきたい。

2 試験問題の程度・設問数・形式等

(1) 試験問題の程度について

今年度のセンター試験本試験は、平均点では「地理A」で57.08点（前年度比+4.94点）、「地理B」で62.34点（同+1.24点）となり、地理Aでは明らかに易化した印象である。一方、「地理B」は、難しかった印象の強い昨年度と比較してほぼ同様の難易度を感じ取れた。高得点の取りにくさはやや解消された感じはあるものの、80点以上の受験者の数を地歴3科目で比較すれば相変わらず地理の高得点者が圧倒的に少ないはずである。これは、地歴公民の選択科目を地理に決めて受験に臨んだ生徒たちには全く納得できない結果である。「地歴科目の中で、なぜ地理だけが突出して難しいのか」「授業を通してこのようなことまで教えなければならないのか」「どのような授業をすれば、しっかり学習している生徒に学力なりの点数を取らせることができるのか」といった教師側の戸惑いの声は、今回も黙殺された形である。地理の場合、他科目のように即座に解答が求められる小問が極めて少なく、どの小問も「初見の図表や地図、設問文など、読み込む内容が多く時間をかけて考える」ことになる上に「複数の知識を重ね合わせて問う組合せの設問」が多いことも要因であることは容易に想像できる。「地理B」を学習した生徒が、しっかり学習をすれば満点近い得点がとれる設定にしていただけのように改めて切望する。

なお、地歴科目の平均点の比較では、地理Bでは、「世界史B」と比較して3.10点下回ったが、「日本史B」は難化したため3.05点上回った。ここ数年、平均点を調整することに意識が行き過ぎて、過度に難度の高い設問が並ぶ傾向が続いている。この点についても毎年指摘を重ねているが、改善の余地はないのだろうか。

また、「地理A」は今年度は平均点が高くでているが、これは知識が相当程度あることを前提に問題作成されているとはいえ、組合せの形式の問が減り、迷う選択肢が少なかったことが影響している。難しい課題ではあるが、とくに「地理A」については、2単位科目であることを踏まえ、知識の有無に特化せず、資料の読み取りや資料活用、思考判断をともなう設問を増やしなから、受験者の学力や常識のレベルをより正確に見極め、思いがけず難問になるということがないように問題作成する努力を引き続き求めたい。

今年度の結果を踏まえ、次年度以降も、時間がかかりすぎることはないか、地理の学習範囲を逸脱した設問はないか、問い方をひねりすぎていないかなどを十分に精査するなど、一層の内部努力を強く期待する。なお、出題の範囲がやや変化したことで受験者には準備しにくい環境となったが、出題のテーマが大きく変更されるような場合は平均点が下がる可能性が高いので、難易の調整をより慎重にお願いしたい。

(2) 設問数や大問の構成、形式について

大問数は「地理A」5問、「地理B」6問で変更はなく、小問数も「地理A」で34問、「地理B」で35問で変わらなかった。各小問はほぼ3点の配点となった。しっかり読み込んで取り組んだ受験者には、「地理A」・「地理B」とともに図表の読み取りが多く、時間はぎりぎりで見直す余裕もないので、小問数がこれ以上増えるのは望ましくなく、これで適当と考える。

大問の構成では、「地理A」第1問で、昨年度の第1問と第2問の「地理の基礎的事項」「日本の自然環境と災害」の出題が合体し、新たに第3問として地誌的な出題が復活した。「地域調査」の大問がA・B共通である点は変化がなかった。「地理B」では昨年度と同様に「地球的課題」を扱う大問がなく、比較地誌の大問が引き続き出題され、地誌が2大問であった。

問題の形式については、例年通り、①「組合せ」の設問がみられること、②「地理A」・「地理B」とともに地図や図表・グラフが多用されていること、③地形図が今年度も出題されたこと、④A・B共通の地域調査で会話文がみられること、⑤写真やイラストが例年以上に多く用いられたこと、などが指摘された。

①について、解答に時間を要する原因の一つである6択の「組合せ」の形式は、今年度も「地理A」で5問、「地理B」で9問出題された。地理Aについては、近年になく「組合せ」の小問が少なかったが、これが平均点を押し上げたと考えられ、「組合せ」で問うことが難化の要因となっていることを窺わせた。この他に、文中の空欄にそれぞれ適語を入れるなど2×2の4択となっている組合せの小問が、「地理A」で5問、「地理B」で3問みられた。「組合せ」の問は、最早定番の形式として受け入れざるをえないが、問題作成上、4択にしにくいなど致し方ない場合を除き、安易に多用することがないように重ねてお願いする。②については、「地理A」(地図・図19、うち地形図3、表4、写真・絵・イラスト6)、「地理B」(地図・図26、うち地形図2、表3、写真・絵・イラスト3)で、例年通り図表の読み取りを問う設問が多く見られた。地理である以上、適切に地図や図表を読み取る技能は重要であり基本的に歓迎する。ただし、理解に時間を要する凝った図表が多数出題されないように配慮をお願いする。③について、地形図は、例年通りの「地域調査」の大問と地理A第1問の防災の問で出題されたが、地理らしい設問として歓迎したい。④について、会話文を用いた小問の質が高い、という声があった。⑤について、今年度は、写真の鮮明度に問題なく、「地理A」第1問の問7、第3問の問1、問4など写真が活かされた小問が見られるという評価の声があった。

3 「地理A」について

新学習指導要領における「地理A」は、旧学習指導要領と比較すれば扱う地域が限定されないなど制約要件は少ない。「防災」「生活文化」「地球的課題」の学習を3本柱として、スケールを変えて地球・世界規模から、また身近な地域である生活圏から考察するというスタンスや地図の活用など地理的技能を意識することは念頭に置きたいが、問題作成の自由度は高まったはずである。ただし、2単位の授業で扱える内容はかなり限定されるし、義務教育段階での社会科の学習内容も知識レベルではまだ薄い。その意味では今年度も、適切なレベルの小問が並んだとは言いがたい難問もみられた。例え出題範囲としては適切であっても、「地理B」並の学習がなされていることを前提と

する設問が多ければ、正答率はかなり下がるはずで、今後の善処を期待したい。なお、今年度は組合せの小問が6問と例年になく少なく、迷う選択肢も少なかったことから受験者はかなり取り組みやすかったとみる。それでも平均点が57点に留まったということは、受験者層の学力が低めであることを反映していると考えざるをえない。

第1問 「地理の基礎的事項及び日本の自然環境と災害」 「地理の基礎的事項」として地図の知識から2問、気候や水をテーマに3問。「日本の自然環境と防災」から3問、計8小問で構成されている。基礎的事項と思える小問は少なく、全体に標準の難易度である。

問1はT Oマップについての知識理解と図の読み取りの小問。中世キリスト教の世界観に立って作成されたものでエルサレムを地図の中心に置いているという知識があれば解答できる。標準とする。

問2はメルカトル図法の特色と利用について述べた文の正誤選択。これは基礎的事項。

問3は4地点の植生景観の説明文のうち北欧の地点のものを選ぶ小問。DとEでやや迷うか。「甘味料の原料がとれる樹木」がメイプルと分かりDと分かれば解ける。標準とする。

問4は地域ごとの「標高10m以下の臨海地域における人口」と「標高10m以下の臨海地域における都市人口の割合」を示す表からアジアを選択する小問。アジアを答えることは容易も、他地域は判断できない。易問ではあるが工夫が足りない。せっかくの資料を生かしきれていない。

問5は乾燥地域における水資源と人間活動について述べた文の空所に補充する適語の組合せを問う小問。これは基礎的事項である。

問6は沖積平野で見られる水害への対策について述べた文の正誤判定。専門用語の正確な知識理解が必須でやや難であるが学んでほしい内容を出題した小問として評価する。

問7は4枚の写真と関連する災害の原因を問う小問。東日本大震災を思い出す。液状化についての知識はかなり定着している。やや易とする。良問の声があった。

問8は地形図から自然災害の可能性を読み取った文の正誤を問う小問。二つの文の正誤をそれぞれ判定する必要があるハードルが高い。やや難とする。

第2問 「世界の生活・文化」 世界の生活・文化について基本的な問いが並んでおり仕上がりが良い。受験者は解答しやすかっただろうと思われる。第1問の基礎的事項の小問よりも平易である。

問1は世界遺産に指定されている宗教建築物の写真からイスラームのものを選択する小問。著名な建築物であり既習の知識と考える。これは易問である。

問2は民族や言語について述べた文の下線部の正誤選択。誤文が明確でこれも平易である。

問3は文化や経済のグローバル化について述べた文の正誤選択。これも誤文がはっきりしているので易問である。

問4は食材と主食にしている地域との正しい組合せ。米とモンスーンアジア、トウモロコシとメキシコ高原など基本的で平易。

問5は図中の4地点の気候と農産物について。地中海沿岸の地点でブドウを選ぶ。これも平易。

問6は4か国の「1人1日当たりの食料供給量」と「牛乳・乳製品が占める割合」からオランダを問う小問。これも基礎的事項で平易である。

第3問 「ラテンアメリカの自然と生活」 「地理A」2単位で、どこまでラテンアメリカの学習を深められているか制約は大きいですが、全体にオーソドックスな内容で取り組みやすい大問という印象である。

問1は地図上の3地点と海岸地形の写真との正しい組合せ。X地点がサンゴ礁が発達しているイメージがあるかどうか。標準。

問2は地図上の4地点の雨温図からブエノスアイレスのものを選ぶ小問。これは気候の学習で定番の問い。やや易とする。

問3は白人と先住民の混血であるメスチソが人口の過半数を占める国。これも基本的な学習内容でやや易とする。

問4はペルーの食文化を説明した文の空所に入る適語の正しい組合せを問う小問。基本的な内容でありやや易とする。

問5は四つの農作物と地図中の産地の分布を示した凡例との正しい組合せ。標準。

問6はラテンアメリカの社会経済的状況について述べた文の正誤判定。正解の文は分かりやすいが誤文は読むに堪えない。誤文と言えども程度が求められるのでは。難易度は標準。

問7はカリブ海諸国の観光客到着数と入国者の居住地別割合を示した図を読み取って述べた文の下線部の正誤選択。内容は平易である。

第4問「地球的課題」 多様な地球的課題から5小問が出題されている。例年難問が出題されやすい範囲であるが、今年度も判断に時間のかかる設問が見られた。

問1は世界4地域の人口の推移。1950年以降のグラフで東アジアのものを問うている。南アジアと迷うか。標準。

問2は三つの国群の「合計特殊出生率」と「GDPに対する保育・幼児教育への公的支出の比率」の相関。学習の成果を問っている良問。標準。

問3はアフリカの食料問題の発生の背景の正誤文選。安易な作りの肢文が気になる。易問。

問4は「2000年と2013年の1次エネルギーの1人当たり供給量」と「1次エネルギーの自給率」を示した表からロシアのものを選択する小問。自給率のみで解答可能でやや易。中国を問えば標準である。4か国の選別が可能で地理らしい良問である。

問5は世界の森林減少について述べた文の正誤文選。地域から問う形式は評価できるが誤文の内容が物足りない。やや易。

問6はパークアンドライド方式を示した図と説明文の正しい組合せ。資料が面白く評価できる小問である。標準。

第5問「長崎県壱岐島の地域調査」 主題図や地形図の読み取り、景観写真からの出題など、地域調査の大問らしい丁寧な問題作成がなされており出来映えがよい。小問が7問になった。「地理A」受験者にとって、とくに不利になることはなかったと判断する。

問1は地勢図の読み取りの小問。定番の問いで易問。

問2は新旧地形図の読み取りの文の正誤選択。これも定番で平易。

問3は3地点からの景観写真。これも定番の小問であるが3枚の写真の景観が近似しており標高など細かく読み取る精度が求められ受験者にとっては意外に難問であった。やや難。

問4は防風林のイラストからその機能を推察する小問。工夫された問である。標準。

問5は漁業協同組合での取材の会話文の空所に入る適語の組合せを問う小問。文も表も質が高く評価できる小問である。やや易。

問6は壱岐市と長崎県内について、「居住する市町内で買い物をする割合」「小学校の複式学級率」「人口1,000人当たりの医師数」の各指標の上位、下位を示した図と指標との正しい組合せを問う小問。大都市が上位の指標、離島が上位の指標、大都市と離島がともに上位の指標と違いの明確な図を選ぶ問で、完成度が高い良問と高く評価された。標準。

問7は調査の方法の文章選択。これも定番の問いであるが誤文にセンスがある。やや易。

4 「地理B」について（「地理A」との共通問題を除く）

今年度の本試験「地理B」は、大問ごとの小問数に僅かな変化があったものの、昨年度と変わらない大問構成となった。成績上位層が高得点を取りやすかったことで、教師側にはやや易化したとの声が出たが、平均点が、難しかったここ数年とほとんど変化していないことから、決して易化し取り組みやすくなったとは言い難い。特に比較地誌の大問が創意工夫がみられる分難しくなった印象である。全体に平易である。

第1問「世界の自然環境と自然災害」 自然環境の4小問と自然災害の2問が出題された。自然災害について問う問5が評価が高かった。

問1は4地域の海底の地形断面図から日本の太平洋側のものを選択する小問。見慣れないが日本なので解答は容易。

問2は海水に覆われにくい海域の組合せ。暖流の知識で解答可能。これも平易。

問3は4地点の気候。最寒月と最暖月の気温、最少雨月と最多雨月の降水量についての初見の図の読み取りに時間がかかる。標準。

問4はヴェネツィア周辺の地形の模式図から地形を読み取った文の下線部の正誤選択。鳥趾状三角州と陸繋島の違いを読み取る。標準。

問5は自然災害にともなう被害の地域別の差異。面白い問い方である。被災者数の多いアジア、被害額の小さいアフリカで判断できる。標準。良問の声あり。

問6は地域防災マップの読み取り。誤文に課題がある。やや易である。

第2問「資源と産業」 定番のテーマながら少しずつ工夫が見られる分、油断ならない小問が並んでいる印象で、点数の差の出る大問である。

問1は日本の農業に関する正誤文選。時事的で「トレーサビリティ」といった専門用語も判断材料となっており、正確な知識理解が求められている。標準。

問2は地域別の「農林水産業従事者1人当たりの農地面積」と「GDPに占める農林水産業の割合」の相関。アジアとアフリカの差別化ができるかが鍵。標準。

問3はバイオマスエネルギーについて述べた文の正誤判定。この小問では「カーボンニュートラル」が判断材料になっている。誤文は巧妙である。標準。

問4は4か国の「エネルギー輸入依存度」と「鉱工業就業人口の割合」を示す表からドイツのものを選択する小問。「エネルギー輸入依存度」のみで解答できる。全て先進国なので、国単位のエネルギー事情の正確な知識理解が求められる。標準。

問5は石炭の生産量、輸出量、消費量の3枚の図形表現図と指標との正しい組合せを問う小問。定番の設問である。中国が断然の生産量であることと日本、オーストラリアを睨んで正解が得られる。標準。良問である。

問6は3都市の工業地域の特徴を述べた文と各都市の正しい組合せ。都市レベルでの出題は難問になりやすいが、これは十分に対応できる知識で標準とする。

第3問「都市・村落と生活文化」 都市についての小問が並び生活文化色が薄い。小問は5問にとどまり、変わって第6問の地域調査が7小問となっている。オーソドックスで解きやすい小問も見られるが、問3、問4はやや難といえる。

問1は世界4都市の住宅景観について述べた文の下線部の正誤判定。写真が参考になっているのかは疑問。誤文も面白味がない。やや易。

問2は都市や村落の成り立ちについて述べた文の正誤判定。明確な誤文でやや易とする。

問3は4か国の「人口の偏在の度合い」と「1人当たり総生産の国内地域間格差」の相関。い

ずれの指標についても、その意味を正確に理解することが難しい。指標について、更に丁寧な説明が必要である。結果的にオーストラリアを答えることはできるので標準とする。

問4は東京圏の人口移動の経年変化。バブル期と最新のジェントリフィケーションで判断することになるがカとキが近似していることもありやや難である。

問5は都道府県別の「老年人口率」「老年人口の増加率」「養護老人ホーム定員数」の階級区分図をみて読み取った文の下線部の正誤判定。これは誤りを見つけやすく平易である。

第4問「中国の地誌」 近隣諸国としての扱いははずれて、改めてどの地域でも出題できるようになったのだなと再認識させられる大問である。これまでは、系統地理で自然や産業、人口の範囲で学んできた内容が地誌的に問われた。テンポよく答えられるがやや工夫を欠いている。

問5の文選が細かい知識を問うとおりやや難である。

問1は図1中の3地点にみられる特徴的な地形。これは知識のみ。標準。

問2は4都市のハイサーグラフ。都市の位置が明確に分かれている。標準。

問3は三つの農作物の作付面積上位10省を示した図形表現図と作物の正しい組合せの小問。野菜と茶で判断できる。標準である。

問4は中国各地の観測地点における硫酸化物濃度を示した図を読み取った文の下線部の正誤判定。誤り方が定番である。やや易。

問5はシャンハイ市とチンハイ省の経済発展について述べた文の正誤判定。①③④の各肢

文の内容は細かい知識で判断を誤る受験者が多かったはずである。「戸籍」の話、「中国最大の油田」はどこか、ラサを結ぶ鉄道が「シーニン」と結ばれているという知識は持っていない。難問であり、高校生の学習範囲の精査を改めてお願いしたい小問である。

問6は中国の少数民族に関する知識理解。これは消去法でも正解できるが、少数民族の言語政策までは踏み込んで教えていない。難易度は標準である。

第5問「スペインとドイツの比較地誌」 昨年度に引き続き比較地誌の大問が出題されたことについては、そのチャレンジに敬意を表したい。ただし、ただ単に両国のデータを比べるだけで、比較することで何が学べるのかについて、その意味が伝わってこないことは残念である。また、小問単位を見ると、問1、問2、問3と、創意工夫が過ぎる力の入りすぎた小問が並び、良問と評価する向きもあるが、受験者にはかなり難しくなっている。

問1は両国の経線に沿った標高の分布と年降水量の分布を示した図について、ドイツに該当する図の正しい組合せ。特に標高をここまで細かく意識して学習しているかは疑問である。面白い設問と評価する声あり。やや難とする。

問2は2か国の農作物の産地分布。ぶどうを問うているが、小麦やオリーブを問うのも面白い。これは良問とする。標準。

問3は国土を「4分割した各範囲での人口20位までの都市数を示した図」と両国の「人口規模上位5都市における日系法人数を示した表」のうちドイツに該当するものの正しい組合せ。発想が面白いが解法を見出せない受験者は少なくなかったか。ドイツが連邦制で小都市が散在しているという知識が邪魔をして誤った受験者が多かったかもしれない。これは難問である。

「国土を単純に4分割することに意味があるのか」、「このような形式が定着されては困る」という声があった。

問4は両国を含む4か国の貿易関係を示す図からスペインのものを問う小問。貿易の要のドイツとそれに次ぐ地位のフランスを知識としてもっていれば解答できる。標準。

問5は両国の移民及び外国旅行について述べた文章の下線の正誤文選。これはやや易。

第6問「長崎県壱岐島の地域調査」 小問ごとの評価は「地理A」での記述の通り。

5 要 約

本試験の「地理A」・「地理B」を小問単位で検証した結果、本年度も昨年度までと同様に高等学校までの学習内容におおむね沿った小問の割合が高く、学習範囲を逸脱した難問や奇問はほとんど見られなかった。この点は高く評価したい。今年度は、「地理A」では大きく易化し、リズムよく解くことができた受験者が多かったと思われる。次年度以降も、今年度のような問題作成を心がけていただきたい。すなわち、組合せの設問を減らすことと、選択を迷う選択肢を極力排除することである。「地理B」では第3問と第5問に難解な小問が複数みられ、高得点をねらう生徒の出鼻を挫いた。受験者の「地理は異様に難しい」「十分勉強したのに報われなかった」「地理を選択すべきでなかった」という声は今年度も払拭できなかった。次年度以降も今年度の評価を参考に、平均点も歴史科目並みになるように、またしっかり学習した生徒が高得点をとれるような問題作成をお願いする。

本会では昨年の講評においても『受験者が高等学校までの授業で学習している範囲や常識的に身に付いていると考えられる知識レベルを問題作成される先生方に十分徹底してほしい』『先生方相互のチェック機能をこれまで以上に働かせてほしい』といった厳しい指摘と依頼をさせていただいた。具体的には、「地理B」第4問の問5を事例に、受験者がどこまで知識をもっているものなのか精査するようにお願いしたい。

また、本会は例年、(1)基礎・基本としての必須な知識を整理し、それを前提に問題作成し、それ以上のレベルの知識には必ず情報を与えること、(2)授業で扱うことのない専門性の高い内容や未だ研究段階で諸説あるような内容を安易に出題しないこと、(3)専門性の高い問題作成者の常識と受験者のそれとの落差に留意すること、(4)解答にかかる時間に十分に配慮すること、を重点としてお願いしている。本会は学習の成果を踏まえた設問であれば難問でも評価する。今年度も新課程を意識した問題作成など、問題作成者のご苦労は十分感じ取れた。次年度以降もわれわれの手本となる問題の作成が行われることを期待して講評を終わる。